

第三十七回 宮島全国短歌大会

梅内 美華子 先生 選

入賞作品

特別賞

広島県知事賞

すきとほるつばさを持つよペダル漕ぐ車輪がふつと軽くなる時

(三四六) 広島 森 脇 淑 子

(評) 自転車走行の体感をペダルが軽くなる瞬間にとらえた。上の句が透明感のある詩的な表現で読者を引き込む。見えない翼は自転車と一体になった時に生じる奇跡なのだろう。スピードと風を思い浮かべることができ、爽快感に満ちた一首である。

日本歌人クラブ賞

月しんと万羽の折り鶴眠らせて被爆ドームの翳深くする

(二二二) 山口 森 元 輝 彦

(評) 原爆の被害を後世に伝える建物が立ち続ける。さまざまに詠われてきたが、あまたの折り鶴を抱いてそこに月光が差しているという情景を描く。静謐なたたずまいと奥行を見出し「しんと」「翳深く」の表現が悲傷と祈りを象徴したものとなった。

広島県歌人協会賞

明日からを委ねるしかない判決をオーダーシャツの袖見つつ待つ

(四九四) 東京 中 安 百合子

(評) 上の句は緊張と厳しい現実を受け止める心境が述べられている。「明日」は誰にも読れるが作者にとつては「判決」によって変わるものなのだ。オーダーシャツを着て待つことに作者の折り目正しさと覚悟が滲む。袖を見るのは静かにうつむく姿である。

山口県歌人協会賞

百万回聞いたとしても行きつけぬ母の歩いた投下後の街

(六三〇) 広島 上 條 節 子

(評) 「投下後の街」は昭和二十年の戦争末期、アメリカ軍によって原子力爆弾が投下された街。当時そこを歩いた母がありさまを語って聞かせる。何度聞いても悲惨で過酷な街をイメージするだけで本当の痛みに辿りつくことができない。直接経験ではないことのもどかしさから逃れないでうたった強さが「百万回」の比喩的な数字に託されている。

宮島全国短歌大会実行委員会賞

ひまわり咲き蝶追う子どもらこんな朝だヒトが原爆落して逃れた

(五二〇) 千葉 猪 野 富 子

(評) 夏という季節を象徴する上の句の情景。「こんな朝だ」の率直な言い方にかつて夏の朝に投下された原子爆弾を想起した心の痛みが集約されている。「ヒトが」のカタカナ表記、「逃れた」の罪深さもよく考えられた表現。戦争の悲惨を反省し続けることがこそ重要であることを静かに訴える。

広島県教育委員会賞

思い出より思い出す日が多くなり十七歳の子今日三十三回忌

(六三一) 山口 津 川 敬 子

(評) 十七歳の若さで逝ったわが子、三十三回忌の歳月の中で悲哀は身にとどまり去ることはない。しかし時間の経過による変化に作者は気づく。上の句はその不思議と感慨を集約したもので切ない。思い出を振り返ること、はつと思ひ出すことはまったく違つたのだ。

廿日市市長賞

生ぬるい水で薬を飲んで寝る夢で私はオアシスになる

(四七六) 岡山 小 橋 辰 矢

(評) 体にやさしい常温の水で薬を飲む。「生ぬるい」の体感から砂漠のオアシスの水を想起している。その飛躍が日常の行為を詩的に広げることになった。「私はオアシス」という断定的な比喩が眠りの世界では自由であることを納得させる。

廿日市市教育委員会賞

軽トラにサーフボードをくくりつけ窓のハンドル回したら風

(五〇七) 愛知 清 水 良 郎

(評) サーフィンをしに海に向かう。軽トラの大きくはない荷台にサーフボードをくくりつけること、窓を開けるためにハンドルを回すことに心弾みと期待感がこめられている。軽トラだから「窓のハンドル」、アナログ的な部分ゆえに「回したら風」の結句が生きる。

厳島神社賞

乾涸びる砂漠に骸横たへて駱駝は昼の星を視てゐる

(二六) 山口 弘 兼 安 雄

(評) 砂漠に横たわる駱駝の死骸。厳しい風土にさらされた無残な光景であるが、見えないはずの昼の星を視ているのだと、生からの解放を考えている歌。ひからびるほどの熱い砂漠に死という安寧があることを星が教えてくれる。

宮島観光協会賞

さつきまでシヨートケーキをのせていた銀の小舟に五月のひかり

(二四七) 千葉 寺 内 ゆり子

(評) 銀の小舟はトレイか皿だろうか。小舟と見立てたことで物が詩的な世界の物にシフトする。日常の中で見つけたきらめく光景。五月の光をのせて揺れているようにイメージできる。シヨートケーキの残影が浮かび、それも歌に親しみを持たせている。

中国新聞社賞

消えそうな細き月あり明星が「おい、大丈夫か」と寄り添っている

(二二二) 広島 徳 田 義 幸

(評) 細い月は月齢の始めのほうか末のほうか。宵の明星が近くに光ることを寄り添うやさしい存在として見ている。消えそうなのは心細さを、寄り添いは心を思いやる他者にも重ねて読むことができる。呼びかけのセリフは作者の声の投影でもあるだろう。

NHK広島放送局賞

疫の世の観音堂のくらがりをただに拝みぬ蚊に刺されつつ

(六七〇) 広島 森 本 直 美

(評) 新型コロナウイルスが猛威を振るい疫病に対峙することになった人類。観音菩薩に終息を祈るしかなすずべをもたない人間の小ささに気づく。堂の暗がりに向かい蚊に刺されることは科学技術から遠い姿だが、そこに日本人としての慎ましいわれを見出している。

中国放送賞

古本をひらけばこちよきかおりパイプを摸せる蔵書印あり

(四九) 東京 野 上 卓

(評) 古本が好きな作者なのだろう、紙や糊が古びた匂い、沁み込んだ匂いも味わうことができる。下の句はかつての持ち主が押した印のレトロでおしゃれな形に関心をもっている。この具体性が効果となっている。「こちよきかおり」はパイプをふかした持ち主を想像させる。

広島テレビ賞

大通りはさみ「ひまわり」「コスモス」のくすり畑が競ひあつてる

(二八六) 愛媛 大 賀 康 男

(評) ひまわりとコスモスが実景ではなく薬局の名前であることが下の句でわかり、巧みな構成である。大通りに薬局が何店もあり競合している現代の風景。くすり畑という比喩に批評性があり、ユニークでもある。

広島ホームテレビ賞

何時ごろの太陽イメージしてますか希望の比喩として使う時

(二六七) 千葉 小田 優子

(評) くの太陽という常套句は希望を託した言い方である。その太陽は何時ごろの照り方でイメージされているのかという疑問は理屈をもってありふれた表現を批評することになる。太陽も高度と時間によつて光線の度合いが違ふからいろいろな太陽があるのだ。

テレビ新広島賞

路地裏のラーメン店の傘立に二本の傘の滴ふれあふ

(二〇一) 広島 小山 美恵子

(評) 路地裏のひそやかな雰囲気は二本の傘の存在から浮かび上がる。傘立てから店に入つた客の傘だと想像させるのもいい。客を描かずに傘の雫が触れ合うことを見出し、ラーメン店の外の光景にきらめきを与えた。

優秀賞

水平線を描き込みし孫かの線を越えてはばたけカモメのごとく

(二八) 山形 佐藤 みのる

尉鷄来たれば豌豆蒔き時と妻は畑の草を取りをり

(三五) 福岡 岸原 修

千円を払って帰る会話らしい会話もせずに理髪店から

(八四) 埼玉 若山 巖

大地には無限の糧が有るのだろうククククと鳩は地を食む

(九五) 広島 岩尾 芳子

白樺の木立の中より笑う声テニスウェアの若きらが来る

(二二九) 福岡 新倉 正成

雪女の読みきかせする我を見る子供の瞳に癌忘れをり

(二三二) 島根

藤井幹雄

春じゃねと目の見えぬ母が窓を向く陽ざしまばゆし病室日和

(二三九) 山口

井口美智子

ほの暗き蓮根の穴より見ゆるものあなたのついた嘘と思えり

(二四四) 広島

富田清人

牛蒡葉に隠れるように雨蛙私はどんなに見えていますか

(二五四) 山口

市岡恵子

「レシートはご利用ですか」ままごとの幼はくれる緑の葉っぱ

(二八九) 広島

田辺操子

石臼のめだかの家に傘をさす豪雨の夜更け日照りのま昼

(二一九) 広島

木戸博恵

母の洗いし数には遠く及ばぬと拭いし皿を戸棚に置きぬ

(三二〇) 広島

岡田真知子

母の日に紫色の靴を買ふ九十七歳歩ける母に

(四八八) 広島

土屋純子

トラックの荷台にゆつくり着地する散布終えたるラジコンヘリの

(五一六) 広島

横山嘉代子

立札に「良い子は川で遊びません」子らの声なし古里の川

(五八九) 山口

向井桂子